

2022. 3. 28

ウエーブ

時評



ロシアの第二の敗戦

田中 均

たなか・ひとし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て(株)日本総研国際戦略研究所理事長、(公財)日本国際交流センターシニア・フェロー。

ウクライナ侵略という、考え難い行動に出たロシアが、凋落していく事は間違いがない。過去20年を超えてロシアのトップに君臨してきたプーチン大統領の周りには意見をくれる人がいなかったのか。テレビで見える限りプーチン大統領の考えに表立って反対できる雰囲気ではない。一人の指導者の判断がロシアの将来を大きく損なう事になるかと思うと、指導者の適時の交代のシステムを持つことがいかに大事か思い知る。ロシアは、仮にウクライナ戦争に勝利したとしても、政治的には致命的な敗戦であり、冷戦に続く、第二の敗戦と言い得る。これからロシアを待

つ世界はどうなるのか。安全保障面においてはNATOとの対峙(たいじ)は一層厳しくなっていく。もともとNATOの拡大の理由はロシアの脅威があったからだが、プーチン大統領はNATOが東方拡大を続け、ついにウクライナにまで伸びてきたことに憤慨し、何とか止めなければいけないと考えたことは容易に想像できる。ロシアはNATOと対峙していくため、クリミアを併合し、黒海艦隊の拠点を確保し、シリア・アサド政権を支援し地中海に展開する空軍と海軍基地を確保してきた。ウクライナの戦いがどう決着するかに関わらず、NATO側

の備えは今後飛躍的に強化されていくだろう。ドイツは既に国防費をGDP比2%に引き上げるべく、本年の予算におよそ13兆円を積み上げた。ウクライナと国境を接しウクライナ支援を行ってきたポーランドに対するNATOの軍事的テコ入れは強化されるだろう。これまでロシアをおもんばかつてNATOに入ってこなかったフィンランドなどのNATO入りも十分考え得る。核が使用可能な武器としてとりわけ戦術核の軍拡が始まるのだろう。ロシア西部への中距離ミサイル配備に対応した中東欧へのミサイル配備も進む。グローバリゼーションは冷戦終

ではないが、いったん、繁栄の匂いを嗅いだロシア国民が黙っているだろうか。ここで中国がロシアを支援し連携を強めるようなことになれば、西側はロシア・中国とデカップリングし、世界は2つのブロックに分断されることになる。中国が自国の経済展望を大きく損ねるような愚かな行動に出るとは思いにくい。

ロシアを取り巻くそのような世界が予想される時、プーチン大統領はどのような行動を取ろうとするのか。健全な意思決定機構が存在していれば、可能な限り速やかにウクライナと停戦をし、NATOと政治合意を作ろうとするだろう。しかし、もうすでに破壊を繰り返した後戻りできないところまで来てしまったのかもしれない。

プーチン大統領が、上述したようなロシアにとっての不都合な現実を直視できるかによって、ロシアと欧州の将来は決まっていく。